

が明らかになった。国父として臣民の敬愛を受けるばかりでなく、政治にも一定の影響力を保ってきた国王も御年 82 歳のご高齢である。立憲君主制の存続のためにも、クーデタや王権に頼らない政治体制の強化が必要である。第 4 に、タイと国際社会とのかかわりである。学生運動が盛んになった 1970 年代

は冷戦の最中だったので、政府は「共産主義の脅威」を口実に運動を弾圧することができた。しかし今では、反共産主義という大義名分は役に立たない。ゆえにアピシット政府は「テロリスト」を創り出したわけだが、果たしてそれは国際的な信用を得られるのだろうか？

外貨経済導入直後の農村

井 戸 雄 大*

私が調査しているジンバブウェ共和国は南部アフリカに位置しており、南にリンポポ川を挟んで南アフリカ共和国と接している国である。日本でジンバブウェと聞けば多くの人が「いまでもジンバブウェ・ドルは、年率何億%というハイパーインフレーションが発生していて、みんなたくさんの札束を運んで買い物をしている国」と答えてくれる（写真 1）。

私も、毎日ジンバブウェ・ドルの闇両替レートや、さまざまな物資・サービスの値段が上がっていく状況を経験した。アメリカ・ドルを小額のジンバブウェ・ドル紙幣で両替をすると、日本人がイメージするような鞆の中がお札でいっぱいになることもある。

しかし、現在、状況は一変している。ジンバブウェの一般市民は、外貨¹⁾を市場で使用

しているのだ。もはや、ジンバブウェ・ドルは、バスの運賃²⁾の支払いを除いて利用されていない。天文学的なインフレーション率を示し、その結果、政府は、度重なるデノミネーションや新紙幣導入を行なったが、2009 年 2 月、ついにジンバブウェ・ドルの使用の停止を宣言し、外貨を市場で利用すること



写真 1 全部で 660 万ジンバブウェ・ドル

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を公式的に認めた。私の感覚からすれば、ジンバブウェ・ドルは死んだという表現が正しいのではないかと思う。町の人にまた将来ジンバブウェ・ドルを使いたいかと聞いたが、インフレに疲れ果てた様子で「もう二度と使いたくない」という答えが返ってきた。

調査地へ

このジンバブウェ・ドルの利用が公式的に停止された直後に、私は、ジンバブウェの村落でフィールドワークを行なった。

私が、調査をしている地域は、ジンバブウェの首都ハラレから北東に直線距離で 100 km 程度の場所にある。この地域は、植民地期ヨーロッパ人入植者が農場を経営していた場所であり、独立後、政府による再入植計画³⁾によって、アフリカ人に開放された地域である。

私は、久しぶりの村人との再会を楽しみしながら、村に向かって歩いていると、隣村のある女性に呼び止められた。「ハイ、チャイニーズ。あんたここに何しにきたの？砂金を集めにきたの？いくら出すのよ？」と突然言われ、その時は、なんで俺に砂金のことなんか聞くのだと不思議に思った。

調査村へ着き何日か過ごしていると、しば

しば河川の方へ女性たちが大きな荷物を頭の上に乗せて歩いていく姿を目にした（写真 2）。気になって彼女たちに「どこへ行くのか」と聞くと「川へ砂金を採りに行く」という。また毎日、私のホストファミリーの家にお客が来て、砂金を何グラム採集できたかということを計測しに来るのである（写真 3）。話を聞いていると、砂金採りは、当時この地域のほとんどの世帯で行なわれている生業となっていた。この活動は前回の予備調査では、数世帯しか観察されなかった。

ジンバブウェの金の歴史

かつてジンバブウェは、金の取引で栄えた国であった。世界遺産に登録されているグレートジンバブウェ遺跡は、11 世紀から 12



写真 2 河川へ向かう女性たち

- 1) 現在ジンバブウェでは、アメリカ・ドル、南アフリカ・ランドの 2 種類の通貨が、おもに市場で利用されている。
- 2) 一般市民が利用するバスは、日本で走っているワゴン車であり、commuter omnibus を略してコンピと呼ばれている。コンピの運賃は、50 セント、5 南アフリカ・ランド、500 億ジンバブウェ・ドル札で 3 兆ジンバブウェ・ドルを支払わなければな

らない。

- 3) ジンバブウェは、植民地期少数のヨーロッパ系入植者が、ジンバブウェの農地の約半分、優良農地に限れば、そのほとんどを所有していた。このような不平等な状況を是正するために、独立後、政府は、ドナーの資金を使い彼らの農場を買い取り、アフリカ人に移譲するという再入植計画を実施した。



写真3 砂金の計測

世紀にかけて、インド洋をまたにかけ活躍していたスワヒリ商人と金の取引で大きな富を築いた国であった。このようにジンバブウェでは、昔から金の生産が盛んに行なわれてきたのである。ジンバブウェの産金地帯はジンバブウェ北東地域と南西地域に分けられ、この地域を中心に、グレートジンバブウェ以降さまざまな国が勃興した。現在のこれら地域を中心に、さまざまな規模の鉱山開発が行なわれている [吉國 1999]。

砂金採りは違法

金は国が管理する資源であるため、収集活動を行なおうとすれば、国が発行するライセンスが必要となる。これをもたないで砂金収集を行なうと、違法行為となり、警察に逮捕されることになる。ここで、私が裁判所で、傍聴した砂金がらみの事件を紹介したい。友人が裁判所で働いていたため、偶然裁判を傍聴するという日本でも体験したことのない貴重な機会を得ることができた。

この事件は、ある場所で砂金の収集活動を行っていた女性2人が、何者かの証言に

よって警察に逮捕された事件であった。彼女たちは検察側が言うことを否認しており、検察が、証人を連れてきたが、結局その証言の信憑性は低いということで、彼女たちは無罪となった。

私は、砂金採集の違法性を認識していたが、一度は、どんな作業なのか見たいという好奇心を抑えきれず、家の人に砂金の収集活動が盛んな場所に連れて行ってもらった。

砂金の収集の工程

砂金の採掘は、乾期でも水が絶えない比較的大きな河川で集中して行なわれていた。約300mの範囲で、およそ100人の人々が、砂金の収集活動に従事していた。この活動は、個人ですべての作業を行なう場合と、砂金収集チームを組んで、作業を分担して行なう方法があるようだ。また、その収集期間もさまざまで、短期間だと日帰りで行なうが、中には、2週間程度河川敷に泊まり込んで、作業を行なっている人々も観察することができた。働き盛りの男女だけでなく、10歳程度のこどもさえも、この砂金収集活動に従事していた。

次に砂金を収集する手順を、写真を使って説明する。

① 穴を掘って土を取る (写真4)。

スコップや鍬を使い、河川敷の土を掘っていく。時には、2m程度の深さの大穴を掘ることもある。河川敷は土の部分が少なく、大きな岩が埋まっている。これから非常に重い石を掘りだしながら、進めていくため非常に骨が折れる作業であ

る。ここで働いている若者は、激しい肉体労働に従事しているため、彼らの体にはたくましい筋肉が発達している。

- ② 掘った土を水で取り除いていく (写真 5)。
掘った土を木製の皿に入れ川の水で土を洗い流していく。金は、土よりも重い
ため、丁寧に土を洗い流していけば、最後まで皿の中に残り、これを慎重に採集し
ていく。何回もこの作業を繰り返して少
量ずつ砂金を収集していくのである。写
真のような姿勢で作業を続けるため、非
常に腰が痛くなってくる。



写真 4 砂金の収集の工程①
穴を掘って土を取る。



写真 5 砂金の収集の工程②
掘った土を水で取り除いていく。

- ③ 採集できたら、ジンバブウェ・ドル札に
包んで大切に保管する (写真 6)。

採集した金は、ただの紙切れとなったジ
ンバブウェ・ドル札に包み大切に保管
する。1 日中砂金の収集活動に従事す
ると、約 0.1 g の砂金を集めることがで
きる。写真に写っている砂金は、約 0.2 g
であった。

砂金の使用用途

村人は、何のために砂金を収集しているの
だろうか。村人が、最も砂金の収集に従事し
ていた時期は雨期 (2 月・3 月) である。こ
の時期は、ちょうど食糧の端境期になってい
る期間である。2008 年の収穫期、ジンバブ
ウェでは、主食のトウモロコシが長雨のため
不作であり、多くの世帯が、食糧を自給す
ることができなかった。さらに、そこへ外貨が
流通したため、農村の多くの人々が、現金に
アクセスできない状況に陥った。しかし、ど
のタイミングで爆発的に砂金収集活動が広



写真 6 砂金の収集の工程③

採集できたら、ジンバブウェ・ドル札に包んで大
切に保管する。

まったか明らかににはなっていないが、仲買人が砂金を外貨や食糧と交換するビジネスが活発化した。これによって、一定の価値をもつ砂金が地域の通貨のようなものとして利用され始めるようになり、村人は、砂金を介して、食糧や雑貨を購入したり、砂金仲買人に売り付けて外貨を獲得することが可能となった。2009年3月での現金との交換レートは、砂金 0.1 g = 2 アメリカ・ドルであった。村では、トウモロコシ粉 12.5 kg が砂金 0.4 g で、調理油 1.2 L が 0.2 g で、村の近くのダムで採れた小さなティラピア 15 匹、1.5 kg 程度が、0.1 g で取引されていた。私のホストファミリーは、精密な計測器を保有しており、仲買人とつながりをもつ世帯であった。仲買人は、大量のトウモロコシ粉袋を彼の家に持ち込み、彼が集めた砂金と交換していた。このトウモロコシ粉の取引は盛況で、12.5 kg のトウモロコシ粉 25 袋が、10 日間で売り切れるほどであった。彼は、仲買人と地域の村人との仲介役を行なうことによって、その差額を得ていたのである。村には、砂金を買い取りに都市から仲買人がきており、村人は、砂金を通じて、外貨にアクセスできるようになったといえる。「村で回収した砂金は、南アフリカまで運ばれ、そこでさらに取引される」とある仲買人は言っていた。

このように砂金の収集活動は、おもに、食糧を得るために行なわれるケースが多いが、食糧が不足していない世帯でも積極的に行なわれている。このような世帯の若年層は自らの小遣いを稼ぎに、空いた時間を積極的に利

用して砂金収集を行なっている。私のホストファミリーには、農作業を行なわないで、もっぱら砂金の収集活動に汗を流している青年がいる。彼の話によると、「結婚資金をためるために砂金収集を行なっている」という。彼は、5月、たった3日間しか家に滞在しておらず、それ以外の日は、村から 50 km も離れた遠方の河川敷まで赴きテントを張り、泊まり込みで砂金収集を行なっていた。

おわりに

本稿では、ジンバブウェ・ドルの利用が停止し、外貨の使用が本格化した直後の住民の生活の一部を報告した。インフレや外貨利用など、普通考えることもできないような厳しい現実が、ジンバブウェの農村にも押し寄せていた。しかし、村人は、大変だとは言いながらも、今起こっている問題を自分にできる最善の方法で解決するだけでなく、将来を見据えた貯蓄さえも試みている。

私は、この砂金の収集活動から、アフリカ人の困難な現実を乗り越える底力を垣間見ることができたと思う。この陳腐な言葉では、表現すること自体ナンセンスかもしれないが、アフリカ人の大きな魅力であるこの「生きる力」には私たちアフリカでフィールドワークをするものはいつも頭が下がる思いがするし、圧倒されっぱなしなのである。

引用文献

吉國恒雄. 1999. 『グレートジンバブエー東南アフリカの歴史世界』講談社現代新書.